

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	神崎 駿介	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	からかい場面に遭遇した児童の行動に関連する要因の検討
------	----------------------------

## 本文概要

**問題と目的**

平成 25 年度の文部科学省の調査結果から、小学校で認知されたいじめのうち、63.3%が“冷やかしやからかい”であると明らかにされている。これまでの研究から、からかいには好意的意図と否定的意図があり、からかわれた側はその内容を否定的に受け取りやすいとされている。本研究では、児童がからかいへの対処行動を選択することに関連する要因として、個人要因の共感性と、環境要因の学級風土に着目し、いじめ抑制につながる知見を得ることを目的とする。

**方法**

X 年 9 月公立 A 小学校および B 小学校に在籍する 4~6 年生 493 名(男子 237 名, 女子 235, 不明 11 名)を対象とした。調査は目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認を得て実施した。調査内容としては、私立大学生 1~4 年生に対する予備調査から、最も多くの学生が小学生時に経験した(見た)ことのある内容のからかいを、シナリオとして提示した。そのシナリオの中で、からかいと直接関わっていない「周囲の人」を登場させ、「周囲の人」がからかいに対してどのような反応(状況)なのか(「注意」・「はやしたてる」・「無反応」)ということで、3 種類のシナリオを提示した。対象者はそれぞれの場面を目撃している「第三者」として、その時にどのような行動(遊び判断・注意行動・はやしたて行動・無反応行動)をするかということについて回答してもらった。この他に小学生用短縮版学級風土質問紙(伊藤,2009)および、子ども用認知・感情共感性尺度(村上ら,2014)に回答してもらった。

**結果と考察**

小学生用短縮版学級風土質問紙の因子構造は、“学級での勉強・活動”“学級へのポジティブな印象”“学級内の不和”が得られ、子ども用認知・感情共感性尺度の因子構造は、先行研究と同様の 6 因子が得られた。一要因分散分析の結果、第三者の行動においては、《第三者・注意行動》は周囲が「無反応」であるときに有意に低く、《第三者・無反応行動》は周囲が「無反応」であるときに有意に高かった。以上のことから、からかい場面において周囲が「無反応」であるときに、《注意行動》が減り、《無反応行動》が増えるという傾向が明らかになったといえる。一方、周囲が「注意」しているときに最も《第三者・遊び判断》がされやすくなっており、後述する相関分析においても、有意な相関が確認できなかったため、以降の分析からは除外することとした。相関分析の結果、共感性の各下位因子および“学級での勉強・活動”、“学級へのポジティブな印象”は《第三者・注意行動》の促進と関連があることが確認された。階層的重回帰分析の結果、高い共感性や良好な学級風土は、《第三者・注意行動》に対して正の影響を与え、《第三者・はやしたて行動》、《第三者・無反応行動》に負の影響を与えることが確認された。以上のことから、児童の共感性や、学級風土は、からかいへの対処行動に影響を与えることが示された。二要因分散分析の結果、周囲が「注意」している状況の《第三者・はやしたて行動》において共感性(“他者感情への敏感性”、“視点取得”)の主効果および交互作用が確認された。共感性低群において学級風土の不良群は他の群に比べて、有意に《第三者・はやしたて行動》得点が高くなっていった。以上のことから、《第三者・はやしたて行動》を抑制していくために、児童の共感性を発達させることに加えて、良好な学級風土を形成する必要があることが明らかになった。